

茶の湯文化学会会報 No.27

第27号 / 2000年 11月 20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314

北欧にあるフィンランドは、世界的に見てもコーヒーをよく飲む国の一つであるが、茶の歴史はまだ若い。私は一九八九年に、フィンランドから日本への二人目の留学生として、京都で日本の茶の湯の勉強をした。こうして私は初めてお茶の世界に入ったのである。それから十年以上になるが、その間に茶の湯は少しずつ私の世界になってきた。

私にとつての茶の湯の世界は、茶の湯の稽古の世界であるよりは、茶の湯の学問の世界である。一九九四年に文学修士をとつてから博士コースに入った。その後およそ三年間（一九九四年から一九九七年まで）、博士論文を完成するために神戸大学で倉澤洋先生に指導を受けて、広く古典の勉強をすると同時に、茶の稽古も続けた。フィンランドへ帰国してからは学問の方が忙しくて、稽古をするチャンスはあまりなかった。ようやく今年の秋、茶の湯における「わび」の思想・「わび」の美についての博士論文を仕上げ、重陽の九月九日に博士号を受領した。

影山先生からフィンランドの茶について書くように依頼され、改めてこちらでの茶の湯の流れを顧みた。毎年、もう十二年間、フィンランドから日本に学生が

フィンランドの“茶味”

ミンナ・トルニアイネン

茶の湯の勉強に行く。そのうち半分くらいは、今でも積極的に茶の湯の稽古を続けている。そのほか、日本で茶の湯の勉強をしていない、また日本を見たことのないけれども茶の湯に興味を持って稽古をしている学生もいる。全部合わせて、ヘルシンキで毎月稽古をしている学生が約十五人いる。稽古の指導者は、ミンナ・プンカリ（宗芳）さんやレイヨ・ラヤラさんで、時々モスクワから来られる西川先生も週末の集中コースで学生たちを集める。

私もミンナ・プンカリさんやレイヨ・ラヤラさんと



ラヒティにおける日本茶道展

協力して、茶の湯の歴史・美・思想についての授業をする。また、全然お茶の事を知らない人々のために公開講義もする。

最近フィンランドでも日本文化に興味を示す人がふえ、そのために日本文化関係のイベントも多くなった。例えば今年の秋、ヘルシンキ市立美術館で雪舟と雲谷派の展覧会が開かれ、同時に同じ場所で行われた。その外、ラヒティでヨーロッパ日本学協会の学会があり、そこでは龍村光峯氏の錦・織物の展覧会があり、お茶の道具の展示会もあつて、茶会も催された。

ヘルシンキ市立美術館での雪舟の展覧会に合わせて、松本からお茶のグループが来て、土・日曜日に、あわせて八席の茶会が行われた。そのさい私は、美術館からの依頼で、フィンランドの人たちに広く、わかりやすく、雪舟やお茶のことを紹介するための公開講義を行った。そのほか、つい最近、フィンランド東洋協会でも茶の湯についての講義を行った。これら以外にもいろいろあるが、これだけでも、フィンランドで日本文化に興味を持たれていることはおわかりいただけるだろう。日本に関する学会の発表や講義などを聞きに

くる人も多い。しかし、茶の稽古を行っている人の数は、今までの十年の間にそれほど多くは増えなかった。その理由はなになのか、考えてみたい。

一つには、こちらの稽古場は茶の湯の雰囲気にとりまじり合ったと合わない。カルチャーセンターの真つ白い壁や、低い天井から掛かっている換気装置のパイプなどはあまり良い印象を心に残さない。畳があり、簡単な点前ができるだけの道具も十分あるが、いくら好意的に考えても、やはり日本の茶室の雰囲気は出ない。フィンランドの人々は「日本」という心深い体験を探している。ほの暗い茶室の渋い錆び壁に竹の花入れ、その花入れに生けられたつましい一輪の花、そして遠い日本文化の神秘的な心、そういうことを少しでも体験したいと思う人は多い。

二つ目の理由は、二つ目とも重なるが、本当の茶室を見る機会がないということである。日本に行ったこともない、茶室を見たこともない人には、普通の西洋建築のカルチャーセンターの床の上に敷いてある畳に座っている外国人が、ただ珍しく、ただ面白いだけである。これでは日本伝統文化の精神を伝えることは出来ない。

若い芽がのびて、どんなきれいな花が咲くのかと本当に楽しみにしている！ヘルシンキで十月三十一日（ヘルシンキ大学日本学教員）

平成十二年度第二回理事会

平成十二年十月二十一日（土）午後十二時三十分より池坊短期大学第二会議室において本年度第二回目の理事会を開催した。出席者は理事十名と幹事二名の合わせて十二名。中村会長の挨拶の後、本年度の大会について話し合い、来月十八日の大徳寺高桐院での茶会と十九日の研究発表・講演・懇親会の詳細を決定した（内容についてはすでに会員に通知済）。

その後、会誌と会報の発行予定、東京例会、第十四回研究会の予定について報告された。なお会誌については、第七号を十月中旬に、第八号を来年三月までに刊行する旨谷理事から報告された。なお、第十四回研究会は来年二月四日東京の主婦会館で開催予定である。

第十三回研究会

第十三回研究会を、中国より中国の茶文化史研究の第一人者、前南京農業大学教授朱自振氏を迎えて、十月九日京大大会館において開催した。倉澤副会長の挨拶・講師紹介の後、大略次のような講演と質疑応答、そして村井副会長の閉会挨拶があつた。参加者は少なかったが、充実した研究会であつた。

茶文化発展における中日の補完関係

朱自振

まず、日中における「茶道」の語の意味の違いについて。日本茶道については、倉澤行洋先生は中国の滕軍（東君）博士の『日本茶道文化概論』の序文に次のように述べている。「茶道は、中国で生まれ日本で花開き実を結んだ、優れた生活文化である。茶道の語が文献に初めて現れるのは唐代であるが、すでに唐代に於いて、茶道は単なる飲茶習俗の域から脱した高度な精神文化であつた。陸羽の『茶経』がその事を輝かしく証明している。」

やがて茶道は日本に伝来し、日本の文化的伝統と結合して新たな展開をとげ、深遠な哲理と豊かな芸術表現とを併せ具えた総合的文化体系として大成された。」

つまり、茶道文化は中日両国の相互補完に

そこで、「日本の伝統文化の精神」や「茶の精神」をフィンランド人にも伝えるために「茶室を建てましょう」という交流が始まつた。うまくいけば、一・二年後には、フィンランド人も日本らしい茶室の空間をフィンランドで楽しめるでしょう！

フィンランドの茶の湯文化には将来があると思う。ヘルシンキのティックリラにある国際小学校のカリキュラムの中に、三ヶ月の茶の湯コースが入っている。今年の春、七人の十二歳の女の子が初めてのそのコースを受け、三ヶ月の間、きちんと茶の稽古をした。着物も着て、最後には、卒業式の時、三百人のお客様の前で、道具の取り合わせの違う三つの二畳の茶席でお茶を点てた。



国際小学校の稽古湯の茶をいただくティ

より創建されたものだ。茶および喫茶習俗は留学僧などによって中国から日本に將來され、更に茶文化の民族化する過程のなかで日本の独特な文化として大成された。

日本茶道を構成した多くの文化要素、例えば茶の精神・茶器・礼儀作法等々については、ほとんど中国の古代文献の中にその根拠と同じ記述を見出すことができる。ただ中国ではそれを日本茶道のような総合文化にまとめることはなかった。唐代には茶道の語に精神的な内容を含めていたが、しかし後世になると、例えば明の張源の『茶録』での用例のように、茶道イコール茶の製造・貯蔵・煎れ方の要訣になった。このような中国茶道は日本茶道とまったく別のことだが、しかしだからといって中国に茶道或いは茶道文化がなかったというわけではない。日本茶道の発展史から言えば、倉澤先生の言われるとおり、「日本茶道は、いわば中国茶道を母として産まれた子供である」。中国早期の茶道文化の基礎がなければ、今日まで伝わってきた日本茶道もありえない。

次に栄西が一一九一年に宋朝から日本に戻ったとき、どのような製茶法を日本に伝えたのかについて。この問題について、日本の学

術界には二つの異なった見解がある。一つは、現在日本茶道で用いられているような粉末状の抹茶であるとの見解、そしてもう一つは、団茶であるとする見解である。後者は宋代の文献に「茶の葉を固形化せず直接粉碎した」という記載がないことを根拠にしている。しかし、『宋史・食貨志』とか王楙の『農書』の記録などによると、宋に貢茶つまり献上茶として餅茶・団茶の製造がまだ続いていたものの、世間ではすでに餅茶・団茶のかわりに散茶と抹茶を大量に生産・飲用するようになっていた。榮西が二度目に中国から帰国したのは、既に南宋中期であったが、その時、中国では餅茶を作りもしなければ、飲んでもいかなかった。榮西が中国国内で既に淘汰され消えていた製茶法を導入し日本茶業を発展させることはありえない。故に抹茶の可能性が高いと考えられる。

最後に、近年の中国における茶道ブームについて。日本茶道のような茶道は中国にはなかった。しかし、一部の人は「茶道」の語の使用例が唐代の文献に既に現れたことを理由に、勉強も研究もしないで、早計に日本茶道はみな「中国から」或いは更に具体的に「浙江省の徑山茶宴から」伝わっていったものだと主張し、わづかな史料を繰り返し利用して、杜撰な茶道論文と著書をたくさん出している。また、いろいろな名前の「茶道」も作り出されていた。例えば、朱権茶道（日本茶道の前身だという）・陸羽茶道・五珍茶道（漢武帝の征西大將軍霍去病によって造られたものだという）・小児茶道・姑娘茶道・嫂子茶道・尼姑茶道。これに対抗して、まったく正反対の見方を持っている日本人もいる。例えば、一九九八年に西安で、ある日本人の学者は「茶と飲茶は中国で発見・発明されたが、しかし中国には茶道文化がない」と放言し、即座に参会者に厳しく反論された。

上述のような狭い民族主義感情を挟む研究は、無論今後の茶道文化の発展に良くない。良識のある日本茶道文化研究者の方々は、ぜひ中国の茶文化学界の研究動向に関心を持っていただきたい。皆様のお力を借りて、現今の中国における茶道文化研究の不正を糾し、お互いに協力して中日両国の茶文化研究を新たな段階に導いていただきたい。

例 会

が完成し、武野紹鷗が引継ぎ、千利休が大成したと言われているが、三要件が整ったのは一五〇二年に珠光が亡くなった少し後の十六世紀初頭である。茶会記は一五三三（天文二）年の『松屋会記』から始まる。十六世紀中頃の天文年間の資料に手前についての記述があることから、十六世紀初頭に茶会と呼べるものがあつたと思われる。

茶会を構成するのは、客・亭主・茶席・道具・飲食・点前の六要件である。この中で最も大切なものは点前で、点前こそが茶会をどのようなものにするかを定める。

久田宗也

茶の湯は、明治維新以後、江戸時代以前とは異なるものになった。第一に、明治六年に暦が旧暦から新暦に変わったことが、茶の世界を支えていた季節感を狂わし、それによって起こった不整合が茶の世界に影響を及ぼした。第二に、男性の世界であった茶の湯が女性に取って代わられた。表千家も明治維新の時に紀州徳川家の禄を離れたので経済的に困窮した。

このように、茶の湯は一時、将来が危ぶまれる状態にあった。しかし、江戸時代中頃に整った家元制度が存続し、また、十職が伝統

工芸の技を伝えたことにより明治維新以後も骨格を保つことができた。明治十年から十三年に北野献茶が行われ、これは現在も続いている。明治二十年に井上馨の屋敷で明治天皇が歌舞伎を見たのが契機となって、古典の復興が始まった。こうした中、数寄者による茶が東京で盛んになった。関西ではそれまで京都が中心だったが、明治二十年代には骨董商春海藤次郎により大阪でも復活してくる。明治三十年代、高橋箒庵、益田鈍翁兄弟など東京の政財界の有力者が名物中心の茶を始めた。

一方で、京都・大阪では家元を中心にして女性を社中に持つという家元体制が整った。これには跡見学園や裏千家などの女学校で茶の湯を教授することにより、女性の茶が増えできたことが寄与していると思われる。

小川後楽

煎茶は、一七〇〇年代後半に登場し、幕末から明治維新を経て日清事変に至るまで勢力を拡大したが、その歴史は浮沈が激しい。

煎茶人が求める精神世界のモデルは中国の文人・詩人の生き方にある。平安時代に藤原冬嗣邸で開かれた茶会の様子を詠んだ詩が、嵯峨天皇勅撰漢詩集『凌雲集』『文華秀麗

近畿例会

九月八日（金）午後六時半から、池坊短期大学において、第十一回の近畿例会を開催した。テーマは「茶会」で、久田宗也氏、小川後楽氏、谷晃氏の鼎談のかたちで行われた。その要旨は次の通りである。

谷晃

茶会については、文献資料としては『師守記』に「終日茶会有、非無其興」（暦応二年、一三三九年、八月二十七日）とあるのを始めとして、十四世紀前半の記録が多い。茶道具・絵画・考古学などの資料もこの時代のもものが明らかとなっており、十四世紀には茶を飲む会が行われていたと思われる。しかしその形態は、現在の茶の湯の会とは相当異なり、闘茶の会であった。これが洗練され四種十服茶となり、公家・武家・寺院の間で盛んに行われるようになる。やがて闘茶は衰微し、茶の湯が起こってきた。

茶の湯が成立するためには、
一、専用空間としての茶席
二、専用器物としての茶道具
三、独自の所作としての点前
の三要件が不可欠である。一般には村田珠光

集』『経国集』に収められている。音楽が奏でられ、お茶が飲まれる。このような文雅な茶会のモデルは中国唐代の文人の喫茶の世界にある。特に有名なのは『茶経』を著した陸羽と「茶歌」を詠んだ玉川子盧全である。江戸時代以降になり、葉茶を急須に入れて抽出して飲むという今日の煎茶の飲み方が現出した。そのときに新しい喫茶の世界を作りあげたのが、洛中で茶を売った売茶翁である。翁は著書『梅山種茶譜略』の冒頭で、陸羽や盧全のように詩を作って文雅な茶を楽しむということを提唱している。これに強く共感して、池大雅・高芙蓉・宇野士新等京洛の文人墨客が翁の周囲に集まった。続いて上田秋成・頼山陽・田能村竹田・青木木米といった人々が登場する。このような強い個性をもった人々が煎茶に心酔して、各々独自の煎茶世界を築いた。そのため、一つの約束事を決めて皆がそれに従うということではないので、継承されず、恒常的な茶会を行うことはできなかった。

明治以降は漢学の知識のある人が教養を披瀝する場となり、一部の限られた人々のものとなった。そのため、煎茶は日常のお茶だけでもいいのではないかと、次第に考えられる

ようになっていった。

東京例会

九月三十日(土)午後一時から、東京芸術大学において東京例会を開催した。発表の要旨は次の通り。

茶の湯源流考・私案

中村 修也

村田珠光・武野紹鷗・千利休は、わび茶の祖・中興・大成者として位置づけられ、一つの流れのごとく認識されている。本発表では、三者の茶系譜に一つの疑問を呈するものである。

まず、珠光と紹鷗が直接会うことがなかったことは、珠光の没年に紹鷗が誕生したという時間的關係から、なんら問題なく承認されるところである。では、茶風はどうであろうか。珠光没後であつても、珠光の茶湯を継ぐ者から指導を受け、さらに紹鷗が珠光流の茶の湯を嗜んでいたならば問題は無いことになる。

だが、『山上宗二記』は「茶湯者伝」において、古市播州・尊教院・菅田屋宗宅については「珠光弟子」と明記するのに、紹鷗につ

いては何も記さず、かえって、藤田宗理を「紹鷗始の坊主」とする。

また、後世の『南方録』には、紹鷗の師匠を十四屋宗悟・宗陳とする。もし、この説が正しければ、紹鷗は珠光の茶湯を継承していないことになる。なぜなら、十四屋宗悟の茶は珠光流の正統ではないからである。珠光流の正統は村田宗珠に引き継がれたことは異論がなからう。『山上宗二記』にも「宗珠は珠光の遺蹟」と記され、他書でも同様の扱いがされている。しかも『宗長日記』『二水記』において、宗珠は当時の「数奇の名人」と評判をとっている。

この宗珠と宗悟が異なる茶湯を目指したことは『分類草人木』の記事から明らかである。宗珠・宗悟が活躍した時期に、紹鷗は実隆に和歌を習うべく京都に滞在していた。そして紹鷗は宗珠ではなく、宗悟を師匠に選択し、京都風とはことなる堺風わび茶の創造に取り組んだとみるべきであろう。

ところが、わび茶を大成せんとする利休は、自分の茶湯がわび茶の祖に繋がることを必要とした。まさしく大成のための準備である。そこで自分と秀吉の關係を珠光と義政に投影し、珠光―紹鷗―利休という系譜を作り

上げたものと推測する。

高知例会

八月二十日(日)と十月八日(日)の二回、J.R土佐荘において十時から例会を開催した。

二〇〇〇年八月二十日

上野焼・創始者上野尊楳について

森 一康

上野尊楳が福岡県の上野焼と熊本県八代焼の創始者であることはよく知られているにもかかわらず、尊楳の渡来説が横行しているのかかわらず、この考察に当たっては、客観的に考察してみたい。

初代、毛利(森) 老岐守吉成(勝信)

秀吉の九州平定の功により天正十五年七月三日、豊前小倉城主 文祿の役四軍主将、慶長の役三軍、僚将

吉成(勝信)、関ヶ原合戦後土佐藩山内家お預けの身分で土佐に回国し吉成は高知城西丸に住まいした。淡交社発行の『原色茶道大辞典』、角川書店の『茶道大辞典』の上野喜蔵(尊楳)の行を見ても、加藤清正に従つて云々と有り、毛利(森) 老岐守吉成によ

る招致説が皆無で、自家の言い伝えとの間が有りすぎるので、約十八年ほど前福岡県赤池町に調査に行ったが、成果もなく帰ってきた。

その後倉吉市在住の分家の毛利亮太郎氏の調査により、渡窯の渡久兵衛家から「朝鮮釜山の城主尊益(甫汝公五代の孫)の子尊楳(上野喜蔵高国) 文祿元(一五九二)年毛利(森) 老岐守吉成(勝信) に従い、家来七〇余人を卒ひて肥後唐津に渡る」とした文献を発見する。今日福岡県田川郡赤池町史も、毛利(森) 老岐守吉成(勝信) 招致説をとる。

要するに上野尊楳は文祿慶長の役当時の小倉城主毛利(森) 吉成(勝信) により文祿元年小倉に招致され吉成の治世時代に開窯し製陶したものである。従って細川三斎はそれを継承・発展させる役割を果たしたことになる。

二〇〇〇年十月八日

カネワリ入門

発題 井上佳彦

十月八日午前十時より、倉澤先生のご来臨のもとで、シンポジウム形式で例会が行われた。先ず発題者より次のような発言があつた。

高知県の茶道界では諸流派の交流が盛んであり、発題者も折々に各流の茶会に参じるこ

とがあるが、各流それぞれに、道具は常に定位置に置き付けられている。これは各流それぞれに存在している置き付けの規矩に基づいていると思われるが、その規矩の源の一つとして、古来カネワリと言われているものがあると考えられる。高知には、カネワリ研究の草分け的な存在として知られた野崎兎園師があり、その資料と共にその道統を受け継いでいる方もおられる。いったい野崎師のカネワリについての考え方はどのようなものだったのであろうか。それを知る一つの手掛かりとして、野崎師がカネワリについて記述した書簡がある。そのほんの一部を紹介すると、

一、小畳ハ炉ヲ一尺三寸二不切シテハ居前ノ割モ悪敷候。

一、小畳半帖ヲ、二二二割故、五尺八寸ハ四四ノ道理也。本録ニ云、台子置方、向ノアキ同前也云々。然バ四寸五分ナレ共、ソレハ一尺三寸二不足、四象ハ別紙ニ申上候。扱、昔ハ今ノ疊ニアラズ。薄縁ノ如キ物ニテ、常ハタミヨセテ置故ノ名也。必要ノ時敷タルヨシ。『源氏物語評釈』ニ見ユ。小畳ハ昔ヨリノ寸尺ニテ、後二台子ヲ合セテレバ、丁度二

ハ有マジク、道具置方、曲尺割モ不都合ノ所有リ。

一、柄杓ハ、イマダ心ツカザリシガ、柄共長一尺三寸五分モ有、何レ定レル寸法アルベシ。炉段は、炉縁ト合セテ二寸、是レヲ炉縁ノ高サニモ用ヒシ物ナラン。大畳ハ二寸二分五厘。

一、茶筌ノ穂ノ事、是モ昔ヨリノ所作ナレバ、カネニ合ハセタルモノナラン。『下略』以上のような発題の後、シンポジウム形式の座談が行われた。

野崎師書簡の中に、茶筌の穂のことが見えるが、カネワリは本来は道具の置きつけについての理論と考えられるが、茶筌のような動くものについてもカネワリが適用されるのであろうかといった疑問も提出された。また、室町時代の書院座敷の頃には床に軸を飾るのに二幅対、三幅対、四幅対等の方式も多くあつたであろうから、それらを何らかの形で整理してバランスよく美的感覚をもって置きつけるきまりのようなものが必要となり、古来日本の生活にも根付いた影響の多い中国よりの陰陽説、陰陽五行説があつたが、カネワリも基本的にこの考えが応用されていたものだろう、といった話が出た。また、野崎師の

説にも疑問が多々あり、カネワリについては未だ研究の余地が多く残されていることなどが話され、さらなる研究は後にゆずることにして、二時間近い例会を終了した。

この後倉澤先生を囲んで昼食会を持ち、親しく懇談した。

投稿

茶の湯と瓢箪(上)

山下桂恵子

NHKハイビジョン大河ドラマ「葵 徳川三代」は関ヶ原役(一六〇〇年)で天下分け目の勝負もつき、この間、何度か徳川家康の馬印が映されていたが、「三成最後」(第十三回)では画面一杯に馬印「金の開き扇」が映し出された。私はこの馬印に興味を覚えた。昔、国定小学唱歌に次のような歌があった。

豊臣秀吉
百年このかた 乱れし天下も
千なり瓢箪 ひとたび出ずれば
四海の波風 忽ち治まり
六十余州は 草木もなびく
あゝ太閤 豊太閤

が紹介されている(今泉淑夫著『東語西話』吉川弘文館、平成六年)。

この徳利は瓢箪徳利と解したい。浄禅兼帯の龍霄が酒を愛し瓢箪を愛したのが知れて面白い。

ところで「閑白様に召し置かれた当代の茶湯者」八人の一人、山上宗二が瓢箪を愛した。彼の号は瓢庵である。やがて片桐石州は浮瓢軒と号し愛蔵の瓢箪茶入(薩摩焼)に「顔回」の銘を付した。

中国では仙人は小さな壺中に住むといわれる。鉄拐仙人は瓢箪の中に住んだという。壺中も瓢箪の中も同じく別世界である。小宇宙を楽しんだのである。ちなみに茶湯は「隠居の清遊」また「仙遊(仙人の遊興)」などといわれ、「壺中天」「壺中日月長」などの茶掛物が喜ばれる。瓢箪が酒壺や炭斗などの数寄物(茶湯)道具になったいわれもうなずける。

天正十五年(一五八七)十月一日、万民偕楽の茶興を演出した北野大茶会では七〇点余の秀吉御物が数か所に分けられて飾られたり、用いられたりした。秀吉が座したと思われる「金の御座敷」の床には墨蹟(虚堂。他の席はみな絵掛物)が掛けられた。黄金の座敷、黄金の道具の中で墨蹟が用いられたという。

「千なり瓢箪」というのは太閤記など、江戸時代の講談・大衆小説が宣伝したもので、秀吉の馬印は「瓢箪に金の切り裂き」であったという。秀吉は早くから茶心があつたから瓢箪の馬印を掲げたのである(秀吉が武家花押ではなく公家花押(秀吉の切韻として「悉」の花文字)を用いたのも同趣向か)。

ところで私は、秀吉の「金の御座敷」に瓢箪茶入が飾り付けられていたことを思い出した。

ちなみに瓢箪は、うり科の植物で原産地はアフリカと見られ、日本では鳥浜貝塚(福井県三方町)から八五〇〇年前の瓢箪の果皮や種子が出土したという。瓢箪は人類誕生の神話や伝説にかかわりその用途は、酒・水・塩入れや柄杓・薬器・茶器などの多様な容器として、また祭事用品やシンボルなど、さまざまな分野にわたり一〇〇を越えるという。

『茶の湯文化学』(五号)によると、最古の茶書といわれる『茶経』に瓢は柄杓として記されているにすぎないが、南宋の審安老人著『茶具図贊』(一一二六九)には、固まった末茶をすりつぶして飲めるようにするための茶具として記されているという。同書には十二種の茶具が擬人化され名字が付けられ着贊

とは注目すべきことであり、そうした中で黄金の台子棚上に飾られていたのが四方盆に据えられた「御茶入ひょうたん」だった(『北野大茶会之記』・『松屋会記(久政茶会記)』)。この瓢箪茶入は北野大茶会における馬印の役割を呈していたのではなかつたらうか。

ところで瓢庵こと山上宗二はその伝書(『山上宗二記』)に

昔、松本所持、豊後二在、瓢箪、小壺也、四方盆、

と記している。「昔、松本所持」は東山時代の町人茶人、松本珠報の旧蔵品ということである。次に「豊後二在」は、豊後の某所持ということであろう。豊後の大友宗麟所持ならば『宗二記』の他の宗麟関係記述から推して「豊後ノ太守二在」と記されるであろうと思われるからである。そこで『松屋名物集』を見ると松本珠報の項に「瓢タン無双、高二寸一分、横一寸九分」とあり、また山口青允アオカケの項には「北野茄子昔松本、ひやうたん同、」と見える。「山口青允」は周防の大内氏、あるいは陶氏の家臣らしい。同書にはほかに瓢箪所持者として「板東屋清於(奈良の豪商)」、「陶(大伴豊後)」、「碓木越中豊後、

されており、瓢(茶瓢)には「胡員外」の官名、「惟一」という名、「宗許」の字、「貯月僊翁」という号が与えられ、これらのすべてが茶瓢を指しているという。また宋代において「茶瓢」は「茶僧」という異名を持つているという。これは僧侶には髪がないので、つるつるの瓢のたとえとし、方岳(一一九九〜一二六二)の「茶僧賦」には、つるつるからまっける瓢がその束縛から逃れてよくぞ出家して仏寺で茶を点てるのに役立つている、と記されているという(高橋忠彦「宋の詩文にみえる茶具―茶臼と茶瓢を中心として―」)。

応永年間(一二三九四〜一四二八)に活躍した相国寺の画僧如拙の禅機画「瓢鮎図」(国宝、妙心寺退蔵院蔵)は、瓢箪に鮎を入れるという不可能事をいかにして可能にするか、という禅の公案を图示したものである。

「東山文化時代の江南院龍霄(永正六年(一一五〇九)六十一歳没)は臨終の病床に草花を持って見舞った美濃守護代斎藤氏夫人に対して「徳利を四つ持っているが、二つは足にもたせ、一つは枕にし、一つは握って死ぬ」と遺言したことが龍霄の実家、甘露寺家や知己の三条西実隆にも伝わった」というの

瓢タン大伴より、「太閤秀吉公」が挙げられている。これらの瓢箪は茶入であろう。なお『茶湯道具名寄』(天正五年)には「うすき越中守」の瓢箪茶入所持が記されている。

大友宗麟の瓢箪茶入は早くに大友氏の家臣、臼杵氏に渡ったという。とすれば、秀吉は九州役で臼杵氏から瓢箪茶入を献ぜられたと思われる。臼杵氏については茶書『追廬集』(天文・永祿(一一五三〜一六九)年間の書写)と『茶湯秘抄』(元文三年(一七三八年)にも「豊後臼杵殿にて云々」とその名が見えるので武人数寄者だったことが知れる。ちなみに大分県臼杵市の祇園祭では瓢箪の作り物を頭にいただいた者が行列の先頭に立つて練り歩くという。(以下は次号に掲載します)

例会のご案内

東京例会

次の日程で開催します。会場は東京芸術大学(東京都台東区上野公園)です。ふるってご参加ください。

〇十一月二十五日(土)午後二時
「川柳に茶の湯をみる」 村上瑛二郎氏

「下総国生実藩主森川家の茶の湯」

小倉 光夫氏

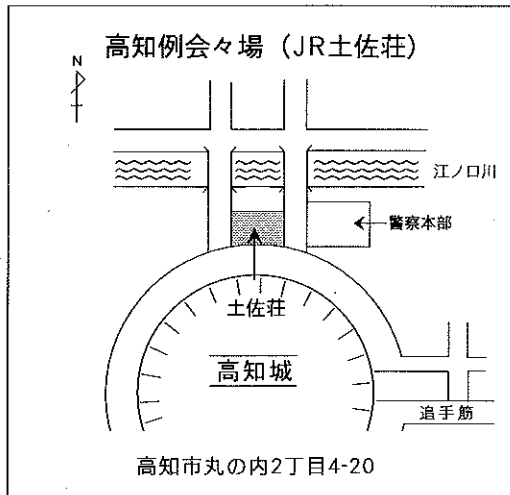
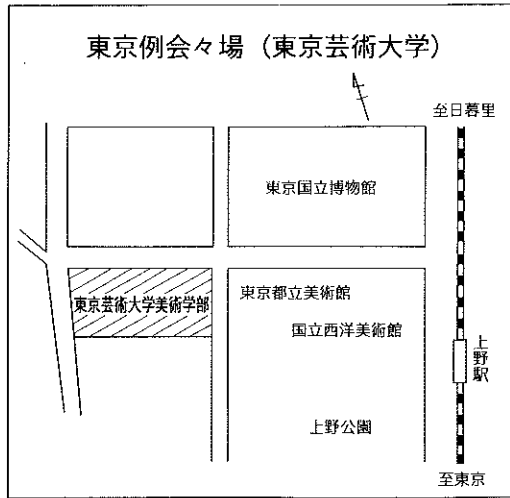
高知例会

次の日程で開催します。会場はJR土佐荘（高知市丸ノ内）です。これまでの例会とは開催の曜日と時間が異なっていますのでご注意ください。多数のご参加をお待ちしています。

○十二月九日（土）午後三時

「茶道と腹気」

中村 雅康氏



後記

*今回二編の投稿がありました。今回はスペースの都合上山下桂恵子さんの投稿文の前半を載せさせていただきました。お二人の著者にはご迷惑をおかけしますが、投稿していただけたことは嬉しいかぎりです。何とか工夫して多くの投稿文を掲載したいと思えます。

*フィンランドのヘルシンキ大学にお勤めのミンナ・トルニアイネンさんに、フィンランドの茶の湯事情について書いていただき

ました。ミンナさんは何度か大会などでお手伝いをしていただきましたし、発表もしていただいたので顔を覚えていらつしやる会員のかたもおられるかも知れません。ミンナさんなどのご努力で茶の湯が北欧の地に根付いていくことを願わずにはおられません。なお、私もミンナさんのふれられた雪舟と雲谷派展をヘルシンキへ見に行ったのですが、山口県立美術館の所蔵品を中心とした充実した展覧会でした。郊外の森の中の美術館で行われたこともあつてか、おしいへしいの観客を集めたわけではありませんが、来られた方々はそれぞれ熱心に鑑賞されており、雪舟を研究するものとして感激しました。

*今パリでは萩焼の展覧会が行われているようです。もしご覧になった方がいらつしやれば、感想をお聞かせ下さい。

*例会のお知らせは会報によることになっており、特別な場合を除いて改めてご案内はいたしませんのでご注意ください。また、インターネットのホームページも活用ください。
(影山純夫)